

青森県地方史研究の成果と課題

長谷川 成一

一、研究団体の活動状況

青森県地方史研究の動向に関しては、既に盛田稔が『日本歴史』196に於て昭和三十年代を、また『日本史文獻年鑑』78に於て四十年代から五十年代に至る研究の歩みを述べているので、本稿では昭和五十年以後現在に至る研究の成果と現状を回顧することにした。

本県の主な研究団体としては、弘前大学を中心とした弘前大学国史研究会が大学に所属する唯一の学会として機能しており、民間の郷土史研究の団体としては、弘前市を中心とする陸奥史談会、青森市の青森郷土会・後方羊蹄郷土会、むつ市に下北の歴史と文化を語る会があり、一方全県的な団体には青森県文化財保護協会がある。各団体は機関誌を発行し、その活動には各々みるべきものがある。

国史研究会は本年度第七〇号の発行を記念して、全国に広く論文を募って本県地方史の再検討を企画し、古代より近代に至る広範囲な問題提起を行なった。なお同会では数年前より藩政史研究会を発足させ、若手研究者による津軽藩を主体とした研究報告を隔月に実施し、同藩研究に意欲的な取り組みをみせている。青森郷土会は会誌『うとう』を86号まで刊行し、また青森県文化財保護協会の『東奥

文化』は54号を数えており、各々郷土研究に充実した成果を積み重ねている。

博物館関係では、昭和五十一年に弘前市立博物館が開館した。同館では津軽藩の歴史資料を常設の展示として、美術・工芸など種々の特別展を開催して、市民の社会教育に多大の寄与をしている。また開館以来の展示資料を、同館では原始から近・現代に至る津軽史を概観できるように編集して、『目で見る津軽の歴史』(昭55)を刊行した。掲載の各図版には詳細な説明が付されており、若干の不鮮明な写真には多少の不満が残るにしても、「知と美の調和」を運営の基調として活動してきた同館の精進の結晶として、広く県内外で好評を博した。同館の他に、板画家棟方志功を記念して作られた棟方志功記念館や県埋蔵文化財センターの設立もあり、美術・考古各方面での今後の活躍が期待される。

二、通史と史誌の刊行

本県の通史としては、宮崎道生『青森県の歴史』(山川出版社、昭45)の刊行後、五十年代に入つて荒井清明『新書青森県史Ⅰ』(北方新社、昭51)が上梓された。荒井は研究蓄積の少ない本県の古代・中

世史をよくまとめて平易に概説しており、続刊が期待される。また概説書としては、豊田武編『東北の歴史』下巻（吉川弘文館、昭54）が維新时期より現代に至る政治過程を各章で論述している。さて五十年代に於ける刊行通史の特徴は、宮崎の先述書を踏まえて、個々の問題の明確化と、従来の研究成果を集約した研究入門が企画されたことであろう。宮崎自身も『青森県の歴史と文化』（津軽書房、昭52）に於て、中世安東氏や津軽キリシタンの問題を掘り下げ、本県近代文化論の展開を試みている。また、国史研究会が創立二十周年記念として上梓した『津軽史事典』（名著出版、昭52）は、津軽史研究の基礎データを集約した本格的な研究入門であり、本県の史学研究に学術的基礎を与えた点で評価される。他に小館衷三『郷土史事典 青森県』（昌平社、昭54）は、辞典としても活用可能な点で便利である。南部方面では、西村嘉『八戸の歴史』（伊吉書院、昭54）が著者のユニークな史観に基づいて叙述されており、示唆に富む八戸通史として新書版ながら確かな手応えを感じさせた。その他、特殊な分野では松木明・明知『統津軽の医史』（津軽書房、昭50）、山上笙介『津軽の富籤』（同、昭53）があり、従来の史学では余り顧慮されなかった分野にも、関心が拡大されてきた事は喜ばしい。

四十年代は全国的に市町村史刊行のブームの様相を呈していたが、五十年代に入っても本県では引き続き活発な刊行が行なわれた。当期の顕著な特徴としては、本県の三大都市（青森・八戸・弘前）以外の市町村で編纂が多くみられたこと、通史編の編纂と共に史料編や年表など、地味な編纂活動が続けられたことの二点が挙げられよう。一般的な史誌としては、『金木郷土史』（昭51）、『板柳町誌』（昭52）、『平内町史』上・下（昭52）、『鶴田町誌』上・下（昭54）、『三戸町通史』（昭54）、『森田村誌』上（昭55）の刊行があった。資料編では、『市浦村史資料編』上・中・下（昭50～52）、『浪岡町史・資料編』1・

2（昭49～50）、『十和田市史・史料編』（昭53）、『横浜町誌資料神社編』1（昭53）、『八戸市史・史料編』近世8（昭55）がある。『市浦村史』の、東日流外三郡誌から同村関係部分を抽出した努力は多とするものの、問題の多い史料だけに史料批判と学術的に高度な解題が欲しかった。なお『八戸市史』史料編の息の長い刊行は、本県近世史研究に裨益する所が大である。年表の編纂には、『野辺地町郷土史年表』（昭52）、『五所川原市史年表』（昭52）、『下北近・現代史略年表』（昭53）、『青森市議会史・別巻年表』（昭54）などがあり、通史編では論及できなかった史実を網羅している。また教育史の分野では学校史の編纂が盛行しており、なかでも『弘前市教育史』上・下・別巻・年表・索引等（昭50～54）は、本県近代教育史の研究水準を新たな高みに押し上げたものとして評価されよう。

史料集の刊行では、永沢得右衛門の『津軽史』5～10（みちのく双書持輯号、昭50～55）が、津軽藩々片日記をジャンル別にまとめて書き抜いた史料集として利用価値は高いものの、句読点の位置など校訂に若干の問題が残されている。

三、主な研究成果

考古学 考古遺跡の所在に恵まれている本県の発掘調査は、青森県教育委員会および青森県郷土館などの機関によって数多く実施されてきた。県教委の発掘は、東北縦貫自動車道工事・むつ小川原開発工事・バイパス工事・工業団地造成・運動公園建設・原子力発電所建設など、開発に触発された緊急調査であつて、その成果は『青森県埋蔵文化財調査報告書』として結実し、60集までの刊行をみている。調査実績の最も多い東北縦貫自動車道工事関係では、鳥海山・三内・源常平・高館・羽黒平・杉の沢・松元・大平・砂沢平・碓ヶ岡古館など、五十年代以降15冊余の調査報告書が出されている。

なかでも、最近発掘された碓ヶ関村大面遺跡での配石遺構は、縄文の墓制を知る上で重要であり、また同所から文化遺物として岩版・岩偶・線刻石など注目すべき出土品の発掘があった。また同村の古館遺跡で大量に出土した擦文土器は、同土器の編年確立に寄与するものとして注目された。その他、青森市近野遺跡では縄文遺跡のほか平安時代の大集落趾が発見されており、このような縄文・平安・中世重複遺跡の発掘が相ついでいる。今後、重複遺跡の調査に際しては、方法論の相違を乗り越えた、考古学と歴史学の効率的な協力体制の樹立が課題となつてこよう。

県立郷土館では開館以来五冊の『調査研究年報』を刊行して、各方面の調査結果を公表してきた。考古部門では、津軽半島の宇鉄遺跡、東津軽郡蟹田町大平山遺跡などを重点的に発掘して、報告を随次年報に掲載している。同館の三宅徹也は『西津軽郡深浦町吾妻野II遺跡の出土土器について』（『年報』1）・『円筒土器の再検討』（同3）を、同じく鈴木克彦は『岩版・土版の研究序説』（同5）・『青森県階上村出土の動物形土器』（『考古学ジャーナル』45）を発表している。右の諸氏の他に、『うとう』『東奥文化』『うそり』『北奥古代文化』『考古風土記』の各誌に、考古関係記事が多数掲載されているので参照されたい。

右に挙げた本県の遺跡発掘調査の大部分を指導し、かつ協力参加してきた村越潔は、『円筒土器文化』（雄山閣、昭49）に自己の研究成果をまとめ、続いて啓蒙書『原始時代』（北方新社、昭50）を上梓した。後者は本県考古学の成果と現状を要領よく概説しており、また考古学に関心を抱く者の入門手引書としての価値も具備している。

古代・中世 周知のごとく東北地方でも特に本県は古代・中世関係史料の僅少な地域で、当該時期の研究には非常な困難を伴う。しかし近年、従来とは異なる新しい視野と方法論を駆使して、問題に

対処する研究が現われ始め、本県古代・中世史に大きな進展をもたらすものとして期待が寄せられている。古代史に於ては、新野直吉『古代史上の津軽』（『国史研究』70）と川副武胤『続四方国考二題』（同）の二論文がある。新野は律令国家体制下に於ける津軽地方の政治的位置づけを綿密に行ない、川副は古代史料に表現されるみちのく概念を丹念に整理しており、いずれも力作である。

中世史では、近年歴史考古学の発達によって、同期遺跡の発掘から多くの知見を得ることが可能になった。青森市尻八館の発掘は、『調査研究年報』3・5に詳細な報告が寄せられ、中国陶磁の発見により東北北端の中世豪族の勢力と商業活動の一端が明確にされた。同遺跡に関しては、右の他に岩本義雄『青森市尻八館の発掘調査』（『考古学ジャーナル』45）、三上次男『津軽・下北半島の中国陶磁と中世の東北』（『日本歴史』385）がある。なお郷土館では、県内の中世板碑の所在調査を開始したと聞くが、遺跡破壊が急激に進行している昨今、このような事業が諸方面へ更に拡大発展することを期待する。発掘が継続中の浪岡城跡については、『史跡浪岡城跡』（昭53）『浪岡城跡II』（昭55）が刊行され、永祿日記や津軽一統志などの文献でしか知り得なかった中世北畠氏の居城が次第に明らかになってきた。中世城跡の発掘報告書は他に、滝沢幸長『史跡根城跡発掘調査概報』（『東奥文化』46）、今井二三夫『堀越城の発掘』（『歴史手帖』514）がある。

福田以久生『嘉元鐘』について（『国史研究』70）、高橋富雄『日本中央と日之本將軍』（同）は、文献を駆使した中世史の本格的論文である。福田は長勝寺嘉元鐘の伝来と刻名人名に検討を加え、しかも集古十種の銘文と照合して現在の刻銘と相違があることを指摘した。また高橋は安東氏の日之本將軍の称号が、実は中世に於ける奥羽に対する特殊な政治的地理観に立脚するものであることを立証

し、右の二論文は本県の中世史研究に多大の衝撃を与えた。この他、中世史の論稿としては森男「本県における藤原藤房卿」(『東奥文化』47)、葛西善一「北畠顕成について」(同50)、肴倉弥八「安東水軍について」(『うとう』84・86)がある。肴倉の論考は、『市浦村史』を使用して安東氏とその海上活動を活写しているが、史料批判の手續きを全く欠如している点が悔やまれる。

近世 藩政史の分野では、津軽氏が南部氏と対抗しうる領国を實質的に形成していく過程をさぐった、荒井清明「津軽藩の成立」(『歴史手帖』5・3)が成立期の論稿としてあげられる。確立期では、従来の小知行派立から御蔵派立へという展開に修正を加えた浪川健治「藩政確立期における新田開発の展開」(『国史研究』67)がある。また浪川には、元禄八年飢饉を中期藩政への転回点として意味づけた「津軽藩政の展開と飢饉」(『歴史』52)がある。中期以降の藩政の動向、とりわけ藩政改革に関する論稿は、残念ながら近年殆ど見られない。寛政以降の藩政に大きな影響を与えた北方警備を扱ったものに、鳴海健太郎「田名部通に関わる上地事件とその後の北方警備」(『うとう』86)がある。また、この北方警備の実態や特徴も含め、近世全期間にわたって津軽藩に賦課された公役を整理し、その特質を手堅く論じたものに、長谷川成一「北方辺境藩研究序説」(『国史研究』68・69合併号)がある。

基礎構造の分野は、現在地方史料の系統的蒐集が急がれている段階であるが、盛田稔『近世青森県農民の生活史』(青森県図書館協会、昭47)は、農民生産力や名子制度など、経済史的観点から多方面にわたって農民の生活実態を追求したもので、現在なお記念碑的意義をもつ。このほか、海岸諸村の数量的把握を行なった工藤睦男「貞享検地帳にみる弘前藩の階層構成」(『幕藩制から近代へ』柏書房)、猷害による大豆生産の危機を扱った西村嘉「南部地方における近世畑

作の諸問題」(『歴史手帖』6・9)がある。また、鳴海健太郎「江戸時代における田名部通一揆の史的展開」(『青森県—その歴史と経済—』、昭53)は、田名部通における八件の百姓一揆を紹介している。このうち四件は、青木虹二「百姓一揆総合年表」(三書房、昭46)に未収録のものである。

次に、港湾・諸産業に関する論稿をとりあげる。深浦湊への入船の分析から、その海運史上における位置づけを試みた、工藤睦男「津軽深浦湊と幕末における廻船の入津状況」(『海事史研究』28)、六回にわたる鎮港令によって、中世以来の油川港が、その地位を青森港に譲るに至った背景を検討した、木村慎一「近世油川港封鎖と青森港」(『三』、『東奥文化』46・48)、酒造業者の経営内容や詳細に分析した盛田稔「江戸時代南部領—酒造業者の実体について」(『うとう』85)、天明期の鰯漁を中心にその流通ルートを明らかにした、武田良子「八戸藩政期漁業について」(『東奥文化』48)。このほか、斎藤彰「津軽塗の創始についての研究」(弘大教育学部、昭53)、永峰文男「野辺地地方材木輸出について」(『東奥文化』46)、同「野辺地湊の商業活動圏について」(同47)などがある。

法制史の分野では、『藩庁日記』などからの、判例の丹念な抽出・分析が緻密な考証を生み、地道な蓄積が続けている。弘前藩の法制史研究は、肴倉弥八による税法・林法・船法等の研究から、蝦名庸一によって刑法を中心としたものに移り、近年は、蝦名の基礎的業績を踏まえて、黒滝十二郎が、刑政の実態を一連の論稿において追求している。主なものに、弘前藩最初の刑法典『御刑罰御定』(『安永律』)について、その成立の背景・慣習法的性格・適用の実態に迫った「安永期の津軽藩刑法についての一考察」(『国史学』97)、弘前藩の牢屋と揚屋の基本的事項、性格を明らかにした「津軽藩の牢屋について」(『国史研究』64・65)、「安永律」の成立過程を藩体制

の弛緩引き締め、身分秩序維持策の中で言及した「津輕藩『御刑罰御定』の成立に關する基礎的考察」(『青森県その歴史と經濟』)などがある。今後は、運用の實際を明らかにするとともに、「寛政律」「文化律」と刑罰規定が整備されていく中で次第に幕府法に接近同化していく現象を、藩政の流れの中でどう解釈していくかが課題となろう。他に刑法關係では、工藤睦男「津輕領屏風山における盜伐者の処分についての一考察」(『弘大教育學部紀要』38)がある。なお、京都大学日本法史研究会編『藩法史料集成』(創文社、昭55)には、弘前藩『御刑法牒』(『寛政律』)が採録されている。

八戸藩の法制史研究は、工藤祐董によって綿密な実証作業が続けられている。氏には、八戸藩々法を武士家族法に限定しながら、その家臣団統制手段としての性格と、幕府法への接近同化を指摘した「八戸藩武士家族法」(『国史研究』66)、失火の際の刑罰事例を紹介・整理した「八戸藩刑法」(八戸工業高等専門学校『紀要』13)、八戸藩支配機構の概要と家臣の階層構成を明らかにした「八戸藩職制についての一考察」(『東奥文化』50)がある。

安藤昌益研究は、近年秋田県大館市二井田での新資料の発見などもあり、県内外を問わず活発な分野である。『大館市史』第二卷(昭53)は、「二井田村と昌益」と題して一章を割いている。全国的な研究動向については、西村嘉「安藤昌益研究動向」(『日本史文獻年鑑』柏書房、昭54)を参照願いたい。最近の本県の研究としては、稲葉克夫「安藤昌益と橋本律蔵」(『国史研究』66)が注目に値する。これは、幕末から明治にかけて昌益の著作を数多く秘蔵していた橋本律蔵について、現段階での事実整理を行ない、従来にならぬ視角からの研究であり興味深い。なお、『八戸市史』通史編(昭51)は、昌益思想を時代の産物として扱い、八戸における昌益について略述している。

さて、以上の諸分野のほか、特に目についた幾つかの研究をあげ

ておきたい。沼館愛三『南部諸城之研究』(『草稿』)(みちのく双書33、昭51)は、盛岡藩領十郡内にある二八六の城について実地調査し、その築城上の構造から役割に至るまでの詳細な分析。同『津輕諸城の研究』(『草稿』)(昭53)はその姉妹編で、津輕地方における一五一の城を扱っている。山本博・宮城一男「佐々木元俊『地学全書』の研究」(『弘前大学教養部『文化紀要』11)は、種痘接種で有名な津輕藩蘭医佐々木元俊の『地学全書』の分析により、その地学史上における位置づけと意義をさぐったもの。宮崎道生「新井白石と津輕史」(『国史研究』70)は、白石のアジア圈認識と世界地理的認識から、エミシ、田村麻呂の征夷等の古代史考察を中心として、近世までの津輕史についての白石の所説を述べている。史料關係では、前期の藩政文書を中心に「津輕藩々政文書編年目録」の作成を通じて、文書の体系化を企て、その検討から、津輕藩々政文書の特徴と問題点を指摘した、長谷川成一「津輕藩々政文書の基礎的研究」(『弘前大学人文学部『文経論叢』15-1)があり、右のほか、篠村正雄には「藩庁日記」と「凶事帳」について(『国史研究』64・65)がある。

最後に、盛岡藩領で特異な位置を占める下北半島の研究動向をまとめておく。この地域の研究は、「下北の歴史と文化を語る会」によって精力的に行なわれており、近世史研究では、「出稼ぎ史」と「海運史」が主な柱となっている。まず「出稼ぎ史」研究では、鳴海健太郎の一連の研究がある。「出かせぎの歴史―下北半島民衆の生活―」(『歴史地理教育』23)、「出稼ぎ―下北の生業―」(『えとのす』7)、「下北出かせぎ史考」(『うとう』82)、「蝦夷地への出稼について」(『歴史手帖』6-9)など。これらの中で、氏はその実態を明らかにしながら、出稼ぎを幕藩制下における強制労働力の一環として位置づける。鳴海の方向を受けついだものとして、長谷川俊行「幕藩体制下における蝦夷地出稼ぎをめぐる諸問題」(『うそり』15)は、出稼

ぎの背景をさぐることによって、半島村内に惹起された余剰人口の矛盾解消策として余儀なく行なわれたもの、すなわち、半島に対する幕藩制支配の貫徹過程で生み出されていた副産物が、松前・蝦夷地への出稼ぎであったとする。なお、これら出稼ぎ者が下北半島に、文化面・意識面においてどのような影響を与えたかという問題も今後の課題として重要である。

次に「海運史」研究であるが、この方面でも鳴海の一連の研究が目につく。氏の着想は、下北人の生活基盤である海から「下北史」を見直すことにある。そして、西回り、東回り、蝦夷地回りの接点である下北半島は、海運史上重視されなければならない土地柄とし、決して後進地になり下がることはないとする。鳴海『下北の海運と文化』（北方新社、昭32）は、これまでの研究成果に新知見を加えたもので、手際よくまとめられている。なお、鳴海を主宰とする「北方文化研究会」は、『下北半島海運史略年表』（昭51）などの「北方文化研究会報告双書」（既刊9、昭33）を刊行している。今後の着実な成果の累積に期待したい。

近現代 本県の近現代史研究は、明治前期までの政治史が大半を占め、それ以降は、全県レベルで、行政機関や諸団体が編集したものの以外は、近年殆ど個別研究のない寂しい状況にある。

まず、函館戦争終結までの維新動乱における弘前藩の動向を詳細に追ったものに、桜庭秀俊の一連の研究、「奥羽越列藩同盟と津軽藩」（『歴史手帖』513）、「箱館戦争と弘前藩」（『国史研究』68・69）がある。松尾正人「東北における維新変革の一形態」（『地方史研究』133）は、その後の弘前藩々政改革の過程を考察したもので、維新政府による地方行政策の実証的研究である。

一方、盛岡藩は藩領を没収され、廃藩置県までの二年間、極めて錯綜した統治下に置かれることになるが、この期の地方行政の展開

過程の分析と整理、及び取締藩の対応から維新政府の地方行政策を検討したものに、三浦忠司の一連の研究、「旧南部領における明治初期の地方行政制度」（『うとう』82）、「奥羽諸藩の動向と没収地取締藩の考察」（『青森県立三本木高等学校誌』昭52）、「弘前藩の南部領取締の経緯」（『国史研究』67）がある。同様の研究に、石崎宜雄による「再び斗南藩成立をめぐる」（『秋田法律学』3）、「元三戸県について考察する」（同4）などがあるが、氏はこれら諸研究を全息的に拡大して、『近代化のなかの青森県』（津軽書房、昭54）を上梓した。これは、青森県成立以前の七県の成立過程を、また青森県発足後は郡区町村編成法発布に至るまでの行政制度の変遷を追ったもので、史料を駆使してきめ細かく跡づけた力作である。この間の農民の動きを扱ったものに、盛田稔「明治三年七戸通百姓一揆について」（『青森県—その歴史と経済—』）があり、その原因を七戸藩の成立に求めている。また、旧土族の動向については、斎藤康司「旧弘前藩士の授産事業」（『歴史手帖』513）がある。

思想史関係では、弘前土族のキリスト教受容過程と、彼らが「土着型」の教会を形成しえた理由を明らかにした、岡部一興「明治前期におけるキリスト教受容の一考察」（『日本歴史』348）、反民権運動を展開する旧土族層の思想的系譜について論及した、松尾正人「明治前期における弘前藩土族の動向」（『近代日本形成過程の研究』雄山閣、昭53）、青森大同派の「第二維新」論・「東北人士論」の流れを跡づけながら、それら思想の地域性をさぐるうとした、河西英通「明治地方政治思想における地域性」（『国史研究』68・69）などがある。また、沼田哲「明治一三年初めの青森県情」（同70）は、宮内省御用掛佐々木高行の奥羽巡視の際の『奥羽記行』の「復命書」を素材に、地方の動向への政府の対策や、佐々木の奥羽巡視の政治的意義をさぐった興味深い論稿である。

次に、行政機関や団体による主な修史事業を掲げる。いずれも労作といえる大冊で、資料的価値も高い。青森県『青森県近代史年表』(昭47)は、その後の修史事業の最も基本となるもので、この分野では大きな足跡を残した。同様に、青森県議会史編纂委員会『青森県議会史』(既刊6巻、昭37)は、各年度の臨時・通常県会の議事録のほか、各政党の支部会の討議・内容なども含み、本県の近現代史研究には欠かせぬものとなっている。また、県内労働運動の推移・起伏を資料を中心に客観的に綴った、青森県民生労働部労政課編『青森県労働運動史』(既刊4巻、昭44)、戊辰戦争から満州国成立までの本県的情勢を、日本政府の流れの中で、誠実かつ大胆に展開した、小野久三・尾崎竹四郎『青森県政治史(1)』(3)(『東奥日報社、昭40・47・55)のほか、青森県農業協同組合編『青森県農業協同組合史』(昭51)、波多江久吉・斎藤康司編『青森県りんご百年史』(昭52)、東奥日報社編『新聞記事に見る青森県日記百年史』(昭53)などがある。

民俗・宗教史 県教委『青森県民俗分布図』(緊急民俗資料調査報告書、昭50)は、県内一六区を選定し、衣食住ほか五類五九項目について民俗資料の分布を地図化したもの。同『青森県の近世社寺』(青森県近世社寺建築緊急調査報告書、昭54)は、保存のための基礎資料収集を企図したもので、二五〇棟余の綿密な調査。県立郷土館『青森県民俗資料図録』(既刊五集、昭48)では、民具・漁具・民間信仰・山樵用具・農具について、豊富に写真を掲載して説明を加え、また同館では、「雪国の民俗」というテーマのもとに、冬期間における民俗調査を実施した。その成果は、『青森県立郷土館報1』(津軽地区、昭48)、『調査研究年報1・2』(下北・南部地区、昭50・51)に収録されている。各市教委の動きも活発であるが、特に、八戸市教委『八戸地方の庚申』上下(『文化財シリーズ』19・20)は、高校生による

一七一の庚申塔の調査を採録したもので、研究の底辺の広がりを感じさせる。

このほか、個別研究報告も多い。民俗関係では、津軽・南部・下北三地区の類似と特色を書き分けながら、本県の民俗を概説した、森山泰太郎『日本の民俗—青森—』(第一法規、昭47)がある。船水清『津軽の祭りと行事』(北方新社、昭51)は、津軽の祭りや行事を月毎に要領よく分類したもの。下北の歴史と文化を語る会編『下北半島伝の歴史と民俗』(伝統と現代社、昭52)は、下北の民俗を、主に信仰・承・芸能の面から言及した。森山「カセギドリ考」(『青森県—その歴史と経済—』)は、カセギドリを「小正月の訪問者」の一類として、その語義や行事の内容を検証している。また、歴史学に引きつけたものでは、衣料品から下北海運の動向をさぐった、鳴海健太郎「下北半島における衣(風俗)生活の史的展開」(『うそり』12)、廻船問屋の年中行事から、その営業の一断面を浮き彫りにした、永峰文男「廻船問屋の家内行事について」(『東奥文化』48)、武家の暮しの中に農民の生活感覚を見い出し、年中行事のもつ社会性について論及した、森山「津軽藩・武家の年中行事について」(『歴史手帖』5・13)がある。なお、『日本民俗誌大系12』(角川書店、昭51)には、本県民俗に関する多くの論稿が収められている。

信仰・宗教史の分野では、小館衷三の仕事が見逃がせない。地方文化に中央の光を当てながら、民間信仰を系統・分類化した点で画期的研究と言える。比叡山文化—台密の布教との関連の中で、お山信仰の史的变化遷を考察した『岩木山信仰史』(北方新社、昭50)、また『水神・竜神・十和田信仰』(同、昭51)は、水神系の諸堂社の全国的な調査によって、民間信仰の「十和田様」を明らかにした。同『津軽水神考』(『国史研究』64・65)も併読願いたい。さらにこれらの成果は、『津軽の民間信仰』(教育社、昭55)において、読み易く再

構成されている。なお、信仰の実態に迫ったものに、江田絹子『津軽のおがさまたち』（北方新社、昭52）がある。このほか個別事例を扱った論稿も多く、盛田稔『南部小絵馬』（青森大学出版局、昭48）、倉弥八「津軽における浄土宗について」上下（『うとう』81・82）、建部ふみ「青森の祇園様」（同84）、同「青森の金毘羅様」（同86）、鳴海健太郎「航海守護の信仰」（同84）などがある。

おわりに

以上、昭和五十年より今年に至る本県の研究を回顧し各問題点を指摘した。従来、本県の地方史研究は、中央学界の研究動向を吸収することなく、個別研究に終始しているという批判があった。今日では、既述のごとく、新しい研究の方向も芽ばえ、実績もある程度蓄積してきてはいるものの、全体を鑑みた場合、研究内容に著しいアンバランスを生じており、しかも明確に示えていない事象が多すぎるように考えられる。このような研究の空隙を埋めるには、各研究がその地域・関心に埋没することなく、また現代的課題や問題関心にいたずらに引きずられることなく、より実証的な史実の解明に全力を傾注することが急務であろう。極めて常識的な指摘に過ぎないが、本県地方史研究の最も基本的な課題なのである。

付記 本稿を草するに際し、田名部高校大畑分校教諭滝本寿史氏に近世民俗・宗教史の分野の協力を願った。成稿に当り、紙数の関係上、長谷川が大幅な修正と加筆をしたので、全ての文責は長谷川にあることを明記しておく。なお、本文中では敬称は一切省略させて頂いた。

（弘前大学助教授）